

ならず、この対立の原理である二つの愛については何も述べていない。この点の欠落は先行する思想から影響を指摘するにおいてもある種の偏りをもたらしている。魂の内に二つの国の対立を見る点でアンブロシウスはアウグスティヌスと相違するとされ、また二つの国という考え方に関する限りプラトニズムからの影響はないと断言されているからである (Chap. 4, B)。「二つの国は、肉体においては混ざり合っているが、意志においては区別されている (cf. *De catech. rud.* 19, 31)」ということばを読むとき、そこにプラトニズムの影響を認めないことはむしろ不自然である。歴史の原理そのものが、歴史的でないのは当然である。

Dermot Moran:

*The philosophy of John Scottus Eriugena.
A study of idealism in the middle ages,*

Cambridge University Press, Cambridge, 1989, pp. XVIII+333.

R. L. シロニス

本書は、その副題が暗示しているように、エリウゲナの思想を十九世紀の観念論の観点から解釈したものである。著者は本書により、今世紀になってますます関心が持たれるようになってきたエリウゲナの思想の現代的意義を示そうとしている。

著者は前書きで、ポエティウスとアンセルムスとの間の橋渡しの役を果たすエリウゲナの思想の研究が、中世後半の思想を理解するために必要であるが、まだ十分に研究されていないと述べ、その思想を想像的・思弁的の体系として特徴づけ、またギリシアのプラトン主義者の教父の神秘的な考えとラテンの思想家の論理的な考えを総合する体系として特徴づける。著者はさらに、エリウゲナの思想の中で、時代に先がけて近代思想と同じことを説く点をいくつか吟味し、彼の思想を観念論的思想として解釈すべきであると主張する。その観念論的点とは、著者によると、エリウゲナの思想の中で存在と同様に重要なものとしての非存在の強調であり、「コギト」と内面性の重視であり、そして特に主体・主観への転換である。

著者はエリウゲナの思想の中に實在論的・存在論的な要素もいろいろ見いだされる

ことを認めると同時に、エリウゲナがそれらに観念論的要素を優先させると主張する。しかし著者は、十九世紀のドイツ人哲学者たちがエリウゲナの思想について行った観念論的解釈を受け入れながらも、その解釈がエリウゲナの思想の文化的背景を無視したとして批判し、本書で次のことを試みていると言う。それは、エリウゲナの思想の文化的背景を考慮しながらその背景にこだわるエリウゲナ解釈と、その思想の意義に関するもっと広い哲学的解釈との間の橋渡しの役を果たす論証を提示することである。ここで初めに本書の内容を簡単に紹介し、次にエリウゲナの思想に関する著者の観念論的解釈とその論証を示し、著者の主張に関する評者の意見を述べておく。

本書の各章でそれぞれ取り扱われるテーマは、「ヨーロッパの九世紀の学問的文化」、
「予定説に関する論証」、「エリウゲナの生涯とその初期の著作」、「ギリシア思想への
覚醒」、「自然区分論」、「哲学者としてのエリウゲナ」、「エリウゲナの思想の源泉」、
「弁証法、哲学と精神の生」、「人間の本性の意味」、「自己認識と自己限定、人間の認
識の本性」、「非存在の意味」、「本性の意味」、「中世後半へのエリウゲナの影響」であ
る。このうちの初めの四つの章は、エリウゲナの歴史的・文化的背景を吟味するもの
である。第五章から第七章までの三つの章は、エリウゲナの思想を主著『自然区分論』
の中で体系づけられたものとして考えるとともに、その思想がプラトン、プロティノス、
プロクロス、オリゲネス、アウグスティヌス、ニュッサのグレゴリオス、偽ディオニ
ュシオス、マクシムス・コンフェッソル等から影響を受け、新プラトン主義的・形而
上学的体系であるが、それらの思想家の伝統的思想に従うものではなく、むしろ九世
紀の文化的衣服を着せられた近代主義的・観念論的思想であると位置づける。第八章
から第十二章までの五つの章は本書の核心をなすもので、そこで著者はエリウゲナの
思想の目立った点として、弁証法、人間の本性や人間の自己認識の概念、非存在や自
然の概念をあげ、それらについて観念論的解釈を行い、エリウゲナの思想についての
自分の解釈を根拠づけようとする。最後の章は、特にエックハルトとニコラウス・ク
ザーヌスへのエリウゲナの影響を述べる。

エリウゲナの思想に関する著者の観念論的解釈をもっと詳しく述べる前に、共鳴で
きる興味深い点に注目しておきたい。それはすなわち、著者がエリウゲナの思想を想像
的・思弁的体系 (*imaginative, speculative system*) として特徴づけることである。
エリウゲナ自身『聖ディオニュシオスの〈天上位階論〉の解説』の中で、神学すなわ
ち神に関する学問が一種の作詩法であると述べている。というのは、神学は哲学的概

念を使用するばかりでなく、人を神の理解に導くために適した象徴的表現をも使用するからである。エリウゲナは『自然区分論』の中で神学的考察をする際に、しばしば象徴を使っている。また新プラトン主義的・形而上学的体系をなすその主著は、著者の構想的想像力を示す。エリウゲナの作品における象徴の意義の問題を吟味することは、象徴的思考の重要性を主張する現代思想のある思潮とエリウゲナの思想との接点を見いだすことを得させる興味深い研究である。

著者によると、エリウゲナの思想の観念論は主体・主観への転換を示す次の点に現れる。それはその思想の中で、存在者の真の存在は精神の内における存在であるということである。別の言葉で言えば、存在者の存在することは、精神によって知られていることである (p. xiii, 283)。エリウゲナの思想において、精神は存在を造る (p. 96)。またエリウゲナにとって、「哲学という学問によって、精神は、自己の恐ろしい力と隠れた本質に関する自己認識と自己理解に至る。精神は宇宙自体の一種の創造主であり、存在論的位階は精神のもろもろの働きによって秩序づけられるものである」 (p. 126)。自己認識の過程は、自由学芸を道具として使用する弁証法的過程である。さらに著者によると、エリウゲナは十九世紀の観念論者と同様、人間の主体・主観を高め、人間の本性が自己充足的なものであることを暗示し、人間の自由が絶対的なもので、自分に法を与えるのものであるとも述べている (p. 97 以下, p. 163 以下)。

著者は自分のその観念論的解釈を根拠づけるために、特にエリウゲナが神の像としての人間の精神・知性について語る言葉と、永遠の神の内における人間の永遠の本質及び神へのその本質の復帰について語る言葉をあげて、次のように論ずる。「エリウゲナは、神の精神の本質と人間の精神の本質とを同一視し、両者の知解が存在を造ると考えている。……人間の精神は根源的に神の精神と一であるから、存在者の存在することは人間の精神によって知られていることでもある」 (p. 143)。著者はまた、エリウゲナの思想において人間の精神が存在者の位階を秩序づけることを示すために、エリウゲナの『自然区分論』における自然の区分とそれによる自然の多様性が、主観の視点の違いによると述べている (p. 282 以下)。

著者の解釈によると、エリウゲナは十九世紀の観念論を先取りするほど独創的な思想家である。それに対して評者は、エリウゲナの体系は独創的ではあるが、観念論の方向にではなく正反対の方向に進んでいると考える。以下、こう考える根拠をあげておく。第一にエリウゲナは万物が創造されて存在することが、人間の精神によってで

はなく神の精神によって知られていることであると繰り返し述べており、この考えはアウグスティヌスから受け継いだものであって、決して観念論ではない。著者はまた、エリウゲナ思想の中に人間の絶対的自由の考えがあることを示すために一つのテキストを引用しているが (p. 164)、それはエリウゲナの言葉ではなく、ニュッサのグレゴリオスの言葉であって、ただ人間が自由によって神の似姿であることを示すだけのテキストである。エリウゲナにおける人間の自由は、ニュッサのグレゴリオスにおけるそれと同様に、絶対的なものではなく、神の自由を分有するものである。エリウゲナはまた、偽ディオニュシオスに従って、神の創造が神の善によることも述べている。さらにエリウゲナは神の像としての人間の精神・知性を高く評価し、神との類似性を強調するが、それと同時に大きな非類似性があることをも繰り返し示している。すなわち神の善、存在、精神、意志などは自分以外のものによるのではなくおのずからによるものであるが、人間の善、存在、精神、意志などは神の善、存在、精神、意志などを分有したものである。エリウゲナは分有に関する考えを偽ディオニュシオスから受け継ぎ、繰り返し強調している。その考えによって、存在者の善や存在などとそれらが多様で存在論的位階を成していることが説明される (人間の知性・精神の視点によってではない)。分有の考えは観念論における投射 (すなわち人間の精神が存在を投射して作ること) の考えとは正反対のものである。著者はエリウゲナにおける分有の重要性を軽視していると思われる。

以上の点に関して著者の考えに共鳴できないとしても本書は実に興味深いものと思う。というのは、本書はエリウゲナの観念論を証明し得ないとしても、エリウゲナ思想 (中世の思想) と十九世紀の思想との接点を示し得ているからである。実際にはデカルトから始まる近代の思想は、中世の思想からさまざまな点を受け継いだのである。その中に人間の精神や主体や自由の尊さが数えられる。中世思想とは異なる十九世紀の観念論の特徴は、人間の精神や主体や自由を、分有による神の像とみなさないで、存在と創造主に優先させて絶対化してしまったことである。観念論のその特徴は、エリウゲナ思想に見いだされない。それ故エリウゲナ思想を特徴づけるとすれば、[西田幾多郎がプラトンの思想について語った言葉を借りて、その思想が観念論ではなく、認識論上からは實在論であり、形而上学上からはスピリチュアリズム (すなわち神と人間の精神 -mens- を強調する哲学) であると言える。著者はエリウゲナ思想の實在論的な点を認め (p. 82)、それが汎神論ではないとも言っている (p. 89)。

評者は著者とともに、エリウゲナが否定神学と非存在あるいは無の概念を強調することを認める。しかしそれらは、観念論の弁証法とは異なり、万物を越え、何の範疇をもつてもとらえられない神の超越性を示すために強調されているのである。

Werner Beierwaltes (hrg.):
Begriff und Metapher.
Sprachform des Denkens bei Eriugena.

Heidelberg 1990

熊田陽一郎

本書は1989年7月、ドイツのバード・ホムブルグで開催された第7回国際エリウゲナ学会における講演を収録したもので、我々にも幾多の知的刺戟を与えてくれるものである。タイトルが示すように、内容はエリウゲナの思想とその言語的表現の関わりについて論じたものが多いが、ここでは特に彼の基本思想である「神現」(theophania) に関わる論文を中心に、若干の紹介を試みたい。

冒頭に Giulio d'Onofrio, *Über die Natur der Einteilung. Die dialektische Entfaltung von Eriugenas Denken* が置かれている。この「区分の本性について」というタイトルは、エリウゲナの主著「自然の区分について」の顛倒であらう。些かのユーモアをこめて、自然区分論の区分の面に注目したものである。即ちこの区分がどのような論理学的手続きによって行われたかを考察し、これがそのまま神学的方法につながることを指摘しているのは、以下の諸論文の流れを暗示するものといえよう。即ち偽ディオニシオス以来の伝統としてエリウゲナの思想を形成する肯定・否定の両神学において、肯定神学は世界の事物について語られた言葉を神に転用するのだから、先づ世界についての正確に分節された言葉が必要であり、従って正確な区分 (diaretiké) の手続きが必要になる。そしてこの区分に対してキリスト教神学においては、神による創造と人間の墮落による世界の「分化」が対応し、これは新プラトン思想では一からの多の「発出」として表現される。他方否定神学においては、この分化した世界についての言葉を否定して神に至らうとするもので、論理学的には多者を統合する